

シェア居住における主体形成に関する文化人類学的研究

—日英の比較を通じて—

主査 田中雅一*¹
委員 成定 洋子*²

本研究は、シェア居住という居住形態を日英の事例を比較することで、両社会における「主体」のあり方について考察を行うことを目的としている。シェア居住は、従来家族と自律・自立する個人という両極の間に位置づけて議論されてきたが、本研究では「相互的な主体性」という概念を参考にシェア居住の可能性を探る。両国の事例について、同居者たちの関係や、相互作用を通じてどのような変化が生じたのかを分析した。他人とともに生活をともにするシェア居住にはさまざまなリスクが認められるが、同時に他者に拓かれた主体の生成においても貴重な機会となっていることが明らかとなった。

キーワード : 1)気遣い, 2)ケア, 3)シェアハウス, 4)エジンバラ, 5)若者論,
6)家族, 7)一戸建て, 8)集合住宅, 9)贈与経済, 10)学習過程

A Social Anthropological Approach to the Formation of Subjectivity in House-Sharing

—A Comparative Study between Japan and Scotland—

Ch. Prof. Masakazu Tanaka
Mem. Dr. Yoko Narisada

This project aims to compare Japanese and British cases of house-sharing and analyze “interactive subjectivity” in both Japanese and British societies. House-sharing in Japan is a new phenomenon, and is considered as a individual reaction to economic depression. It is considered as a transitional stage from less independent to fully independent life with one’s own family. However, our findings suggest more social implications. Those who live with “others” can develop a sensitive consideration to the other. Our analysis of British cases shows a radically different concept of self than an individualistic one.

1. はじめに

日本におけるシェア居住は、近年増加と多様化の傾向にあり、社会学や住居学など学際的な研究対象として注目を集めてきた社会現象の一つである。かつては、大学生時代やその後に続く独身時代に、下宿や寮生活、あるいは台所・トイレ共通のアパートでの居住体験を通じて一種のシェア居住体験をするのが一般的であったが、1980年代に学生用マンションあるいはワンルームマンションが生まれたことで、そのような居住体験を得る機会も減ることになる。シェア居住への関心の高まりを受けて、これからシェア居住を始めた人や事業をしたい人向けに「入門書」も多く発行されている^{文1,2,3,4}。

本報告では、主としてひとつの家屋あるいは集合住宅の一部（マンションの一室）を複数の人びとが共同で使用している場合をシェア居住とみなす。この場合、夫婦や親子、恋人同士でない、いわゆる「他人」同士が居間、台所・風呂・トイレを共有して住む。これは、ハウスシェアとかフラットシェア（フラットは家屋の一部、通常

ワンフロアに個室と共有スペースがある場合、しかし大きなフラットだと内部に二階や三階もある）という言葉にほぼ対応する。本報告書では大きなホステルや学生寮などでの共同生活を想定していないが、ハウスシェアと寮生活を区別するのは難しい。また、どのような形であれ、一つの部屋を共有するのはルームシェアであって、ハウスシェアやフラットシェアと異なるが、ハウスシェアの中には一つの部屋に複数のベッドを入れて個室を認めていない場合もある。この場合ルームシェアとハウスシェアが併存しているとも言える。

本研究の目的は、英国と日本におけるシェア居住の日常実践を明らかに、「相互的な主体性」が日常的に構築されていく過程として、シェア居住を考察することである^{注1}。ここでいう「相互的な主体性」とは他者との交流を通じ、また他者との相互依存を通じて形成される主体性であり、個人主義的な理念が想定している自律・自立した個人や、他者への従属を通じて承認されるような主体性と対比される^{文5}。

*1 京都大学人文科学研究所・教授

*2 成定洋子 沖縄大学法経学部・准教授、当時東京学芸大学教育学部・特任准教授

2. 背景

本研究の問題意識は二つある。ひとつは、なぜシェアハウスかという問い、もうひとつは、なぜ英国との比較かという問いである。

第一の問いは、日本社会の居住形態と居住単位についての見直しという社会的な関心に関わる。日本に住む多くの人びとにとって、一戸建て家屋を建てることは人生最大の目的の一つである。しかし、その結果、郊外へと住宅地が拡大し、都市部の職場と自宅との距離がますます離れつつある。一戸建ての夢は、日本の経済発展の原動力になったと言えるが、自然破壊など多くの弊害をもたらしている。集合住宅という選択肢もあるものの、ほとんどの場合、それはあくまで一戸建てという目標の一過程に過ぎない。また、一戸建てであれ集合住宅であれ、その居住単位は、異性愛に基づく核家族が基本とされてきた。しかしながら、核家族もまた、個食あるいは孤食、ひきこもり、家庭暴力、ドメスティック・バイオレンス(DV)などの言葉が示すように、多くの問題を生み出してきた。少子高齢化、不安定雇用の増大、自然環境保護への意識の変化は、家族や住居に対する筆者たちの考え方に大きな影響を与えている。はたして、核家族で一戸建てに住むという人生は理想なのだろうか。さらに、文化人類学者として、田中はスリランカや南インドで長期の調査を行ってきた。また成定は沖縄で長期の調査を行っている。これらの調査地でさまざまな家族の形態や親族関係に接してきた経験から、高度経済発展の時代に生まれた核家族や一戸建ての理想がはたして絶対的なものか疑問に思うようになったのである。

もうひとつの問題意識は、より個人的なものである。それは筆者たち自身の英国での居住体験である。英国のシェア居住に触れると、私的空間が極めてあいまいであるという印象を受ける。日本人は一般に、英国人(あるいは欧米人一般)より日本人の居住空間の方が公私の区別があいまいであるとか、英国人の方が個人主義的であるという考えを聞かされてきた。たとえば家屋の建築材の相違から欧米社会を石の文化、日本社会を木の文化として対比する考え方にしばしば出会う^{文6)}。石の文化は外と内の区別が強固で、個室(ベッドルーム)には鍵がかかる。これに対し、日本の家屋は表と裏あるいは奥という考え方によって理解されている。内と外の関係は、縁側などからも明らかなように曖昧である。各部屋を仕切るのは壁ではなく、障子や襖である。長屋などの集合住宅においては、二つの家を仕切る壁は薄く、隣家との境さえ曖昧である。このように家屋を見ると明らかに欧米社会の家屋の方が居住者のプライバシーを尊重するつくりになっている。ベッドルームについても、これはあくまで夫婦の寝室であって、幼児がそこで寝るのは厳しく禁じられている。寝るときは別の部屋で寝かされる。

日本のように子供を挟んで川の字になって寝る、それが円満な家族の象徴だといった考えは存在しない。それ以外のいろんな事例から、日本人はプライバシーを尊重しない、公私の区別が不十分だ、公人としての自覚が足りないなどの批判(自己批判)が生まれる。こうした劣等意識も一要因となって、書斎や子供の個室がある一戸建てが求められることになる。しかし、子供の自立やプライバシー尊重の象徴となる子供の部屋が、自立を拒否するひきこもりの砦となってしまふ。

そもそも、欧米と日本についての対立図式は本当なのであろうか。すくなくとも私たちの英国留学時(田中は1980年代後半、成定は2000年代)やその後の短期訪問でのシェア居住体験から言えることは、英国におけるシェア居住の慣習と実践は、上記の常識からかなり逸脱しているということである。私たちは、英国社会の特徴について、何か重要な特質を見落としているのではないか。

以上の問題意識を念頭に、本研究は、日本と英国におけるシェア居住の日常実践に関する文化人類学的比較研究を通して、核家族(ソフト)＝居住単位＝一戸建て(ハード)というこれまでの日本社会で当然とされてきた等式を批判的に検討したい。また、日英の比較を通じ、その相違を明らかにするとともに、共通する点についても考察したい。

3. 方法

本研究の方法論は、文献調査、インタビュー調査、およびフィールドワーク調査からなる。インタビュー調査では、田中が2014年3月～9月の間に首都圏と関西、沖縄県において22名にインタビューを行った。実際に住むことはなかったが、12のシェア居住の事例を扱い、8つのシェアハウスを訪問した。成定は2013年8月、スコットランドのエジンバラ市において、7名との調査票に基づいた対面によるインタビューを実施するとともに、フィールドワークは、2013年8月、約1か月のシェア居住を、スコットランドのエジンバラ市内の集合住宅で行った。インタビューは調査協力者の母語の種類に関わらず、全て英語で行った。なお、本研究は、日英の比較を目的とするとはいえ、サンプルは限られているし、統計的な比較にあまり意味はない。むしろケアや自己の変容というやや抽象的な領域での事例分析を目指したことをことわっておきたい。

4. 分類

シェアハウス大手のひつじ不動産はDIY(Do It Yourself)型と事業体介入型に分けている^{文4)}。前者は同居予定者が物件を探し、自分たちのルールを決めて住み始める場合、後者は不動産会社などが介入し、入居などの手続きを直接行う。シェア居住を目的に建築された家

屋は後者のタイプが一般的である。

阿部ら(阿部&茂原 2013:21-22)は、さらに同居目的(コンセプト)が特化しているかどうか、同居者が知り合いかどうかによって4つのタイプに分けている^{文3)}。

本研究では、日本における新しいシェアハウスの動向を示唆するものとして「若者同士が共生する」というコンセプトを共有する複数の「共生型シェアハウス」について時間をかけて調査を行った。これは同居人を公募すること、事業者(不動産)が介入しないという点で従来の分類に収まらない。また、目的が「共生」以外に共通性がないという点で阿部らが想定している事例からも外れる。この意味で典型的とは言えないが、現代日本社会の動きとも密接に関わること、また英国との比較においてはどちらも若者が主たる同居人であるという点で意義があると考えている。

5. 先行研究

5.1 日本からの視点

日本では、今世紀に入ってシェア居住が新しい住まいの形態として注目されている。メディアなどでの注目度が高くなるのは2005年度以後のことで、2007~8年を境に急増する^{文7)}。その背景には、「はじめに」で指摘したように、核家族と一戸建てを人生の目的とする考え方の見直しが迫られているという大きな変化があると思われるが、より直接的には、長引く不況によってとくに首都圏における若年層がシェア居住という形態に注目したこと、また地主や不動産会社も首都圏に増えつつある賃貸住宅の空き家の処理としてシェア居住に活路を見出したことが指摘できる。さらに留学体験や情報を共有し、同居できる仲間を募るのが容易なSNSの普及を加えることもできよう。実家を離れ働く女性が増えたこともシェア居住の増加と関係していると思われる。2004年にmixiがサービスを開始し、2007年には利用者は1000万人を越える。需要と供給が一致したのである。そんな状況で、徐々にシェア居住の研究や報告書も増えてきた。

家族社会学の分野では、実際にシェアハウスの経験がある久保田がその著書『他人と暮らす若者たち』^{文8)}でシェアハウスの社会的意義に注目している。これは今からおよそ10年前に実施された調査で画期的なものである。シェア居住する理由として非経済的理由をいくつか挙げているが、その一つに家族との暮らしでは役割がほぼ固定しているが(子供はいつまでたっても子供である)、他人との暮らしではこうした役割は固定されておらず、むしろ他人との距離感の調整が重要となる。そして、「より積極的に、他人との暮らしのなかで自分を変えていくきっかけを掴もうとする姿勢を」みせる^{文8)}。ここでは家族(役割はある程度固定、甘えと干渉が認められる、プライベートが守られにくい)と一人住まい(自立・自由

が保証されているが孤独、自堕落さの増加)、あるいは家族から自立して自分の家族を作るという人生設計における住居形態のあり方などが問われていると言える。

この自己変革はどこに向かうのか。そのひとつは同居者への気遣い(ケア)であると思われる^{文8)}。この「共同生活者への気遣い」は、母による子供への気遣いとまったくの他人への気遣いの中間に位置するというインタビューの受け手の言葉を紹介している。シェア居住するとこうした気遣いが生まれるのだろうか。本研究の目的は、「相互的な主体性」を日常的に構築していく過程として、日英におけるシェア居住のあり方を考察することであった。この「相互的な主体性」とは相互に気遣う(ケアする)主体と理解していいのだろうか。久保田は、シェア居住は生き方そのものに関わる実践であると指摘している^{文8)}。この点について筆者たちも同意するが、それは家族やそれ以外のコミュニティに見られる否定的な側面(力関係に基づく支配や排除など)の解決になるのだろうか。シェア居住にもまた否定的な側面が存在することを無視するわけにはいかない。本報告では、シェア居住の可能性とともに、問題点などについても触れてみたい。

久保田の書物が公刊されてから数年後に、『シェアハウス——わたしたちが他人と住む理由』^{文7)}が出版される。これは出版当時シェア居住を実践していた女性二人の共同執筆で、ほかの実践者へのインタビューも含まれている。出版年は久保田の書物とそれほど離れていないが、データは10年ほど新しい。シェア居住は、たんに同居者の間での交流が盛んになされる(避けられない)場、すなわち共同空間は公私が交わる汽水域である^{文8)}というだけに留まらず、外との交流も増加する。シェア居住は、「外界に玄関を開け放している場」^{文7)}となる。なぜなら、月に一度くらいの頻度でさまざまなテーマの飲み会を開催しているからである。こうした外界への広がり・つながり感覚について、著者のインタビューに応じて野村は「家と外行きとの中間みたいな心地よさ」と表現する。それはまたSNSでのつながりがリアルに実践することでもある。野村にとってシェア居住は「人生が変わりそう」な体験であった^{文7)}。つまり、シェア居住は、家族と仕事、うちとそと、ネットと現実の中間状態にあるが、それらのものでない新しい体験が可能な場所ということになる。それは、自宅と職場の中間に位置する「サードプレイス」^{文9)}に匹敵する場所と言えるのかもしれない^{注2)}。

日本におけるシェア居住は、あたらしい現象と位置づけられているため、それを居住形態に限定せずに、未来志向のライフスタイルの一部と主張する論者が散見されるし、当事者についても類似の主張が認められる^{文10)}。

シェア居住を通じて提唱される新たな考え方の一つが「所有」についてのものである。シェア居住は空間と時間だけでなく、さまざまな物品をも共有する。それは突

き詰めれば所有の否定へとつながらないであろうか。そのような視点は、シェア居住という住まいのスタイルを離れて、あたらしい生き方そのものの創出へと向かうことになろう。

もうすこし一般的に述べると、シェア居住とは、あくまで生産活動をその外部に依存し、かならずしもその活動を同居人が協働しない場合を意味するのである。それは共同体としては不完全で、自律・自立しているとは言えない。しかし、従来の生産中心のコミュニティが、一見新しいと見えて、多くの場合閉鎖的な家族の拡大でしかない場合を考慮すると、シェア居住は、生産活動を外部に依存しかつ同居人に生産活動に関する制限がないという点でより外部に拓かれた共住世界を生みだしていると言える。その意味で、シェア居住の発展形態として「ユルイムラ」^{文7)}という概念はきわめて重要だと評価したい。類似の視点を三浦は「ゆるやかなつながり」「つながりたいが、しばられたくない」と表現し、拘束力が強い共同体に対し、「共異体」という概念を提案している^{文10)文11)}。

シングル自体が多様な形態をとり、一生シングルの人も、また離婚や死別でシングルになる人もいる。シェア居住もまた、人生のさまざまな段階に認められてもおかしくない^{文7)}。高齢者についてはもちろん、実際最近ではシングルマザー専用のシェアハウスなども生まれている^{文12)}。ここには、経済的な要因だけでなく、相互ケアという視点が重要になってくる。とはいえ、英国のように複数のカップルや夫婦がフラットをシェアするという例はほとんどない^{注3)}。

日本のシェアハウスについての文献は、これを新しい事象として位置づけ、そこに生き方の可能性を見ようとしている。しかし、紹介されている事例から明らかなのは、なお理想的なシェア居住や「ゆるやかなつながり」を求めて模索しているという点である。そこで想定されているのは、家族における相互依存や相互干渉でも、完璧な自律・自立でもない自己と他者の関係である。そこで求められているものこそ、本研究で述べる「相互的な主体」と言える。それは私的所有によって自己表現しようとする自己ではなく、どちらかという贈与や共有(シェア)によって他者とゆるやかにつながる自己である。それでは、個人主義が発達する一方で、シェア居住について長い歴史のある英国ではどうであろうか。

5.2 英国からの視点

英国では、近年、単身世帯(一人暮らし)の増加が目されているものの^{文13)14)}、特に、若年層——学生や社会人——のシェア居住は、習慣化・一般化している。英国の統計調査における世帯には、「調理器具や居間、食堂をシェアする同じ住所の(必ずしも親族とは限らない)人びとの集団」も含まれることから^{文15)}、世帯の統計調査に

において、シェア居住という居住形態が前提とされていることがわかる。しかしながら、英国における学術研究は、英国の若者たちにおいて特徴的であるシェア居住を注視してこなかった。

2000年代に、英国におけるシェア居住に関する本格的調査研究——主にインタビュー調査——を始めたヒースらは、シェア居住の選択理由が経済的要因にあるにせよ、シェア居住に対する経験者の個人的評価を見逃すべきではないとしている^{文16)}。1996年以降の英国では、一人暮らしの(シングルルームに単身で居住していた)場合生活保護による賃貸補助金を得ることができなくなったため、必然的にシェア居住が貧困層の間で増加してきた。ヒースらによると、メディアによってシェア居住が「ファッションナブル」で、裕福な若年者層にとって人気のある居住形態であることが強調されていて、2000年代以降シェア居住は貧困層だけでなく、中産階級の若年層によっても主体的に選択されることになったとみている。すなわち、ヒースらの調査協力者たちの多くは、経済的要因ではなく、個人的選択に基づいてシェア居住という決断をしていると確信し(Heath & Kenyon 2001a: 624)、それが自分にとっての「正しい選択」であると考えているという。しかし、シェア居住の理由を、貧困層の経済的要因や経済的に余裕のある若年層ファッションに還元するだけでは不十分である。動機がどうであれ、シェア居住の体験に密着した視点が必要であると考えられるからである。ここで注目したいのは、シェア居住研究が本格化するのとはほぼ同時期に実施されたジャネット・カーステンによる新しい親族研究である^{文17)18)}。

カーステンは、これまでの社会人類学や文化人類学における親族研究を批判的に検証しながら、日常生活における当然視されがちな行為、たとえば食べ物を分け合ったり、近所の人に料理したものをおすそ分けをしたり、おしゃべりやお茶のために隣近所に出掛けたりすることを、丁寧にみる必要があると主張する。こうした繰り返しなされる些細な日常実践こそが、人びとの関係を濃密にし、「親子」や「親族」関係が生まれるのである。それらは、かならずしも血縁によって自動的に決まるのではない。日々の実践が関係性(relatedness)を創出するのである。

また、カーステンによれば、近年の親族研究は、①西洋における再生産技術や新しい親族の形に関する研究と②非西洋社会における伝統的な親族研究に二分されている^{文19)}。前者では個人の選択が前提となり、後者では個人は地縁・血縁関係やつきあいの網の目に埋め込まれている。これらの対照の背景には、西洋的な「自律・自立した個人」に対する(より劣った)非西洋的な「関係的な人びと」という対比が認められる。しかし、西洋に关系的な人びとは存在しないのだろうか。カーステンは、西

洋における「個人」が、どのように他者や親族と「関係的」であるのかについて考察する必要を主張し、先の西洋と非西洋という対比の再考を促す。「自律・自立した個人」という西欧に確立された前提を疑問視するカーステンの視点は、直接家族や親族を対象とするわけではないが、シェア居住を通じて形成される主体のあり方を考察目的とする本研究にとって重要と思われる。

本研究ではシェア居住が、日英比較を通じてどのような影響を当事者に与えるのかという問題意識を念頭に、「自律・自立した個人」という西欧的前提を主体形成の視点から再考することを試みたい。

6. 事例

6.1 日本の事例

1) 概略

以下、同じアルファベットはシェア同居者であることを示す。たとえば JK1、JK2、JK3 はひとつの家屋あるいはマンションの一部屋 JK をシェアしている。

本研究で扱った事例のうち、不動産主導のシェア居住に入居した場合 (JA1: 30 代の女性、大学教員、15 人が同居)、友人たちと話し合っ一軒家を借りた事例がひとつ (JB1 女性 2 名と男性 1 名、全員学生)、それ以外は、居住者一人あるいは複数 (友人同士) で家屋を見つけ、同居者を募集した事例である。E は IT 関係者が集住していて、セミナーなどを定期的に開催していた。規模は小さいもので 2 人 (JC1: 20 代の女性)、3 人 (JD1: 30 代の男性 1 名、20 代の女性 2 名) などがあるが、大きなものだと 15 人が居住している。

調査の対象となった共生型シェアハウス (以下共生ハウスと略する) は若者の共生を共通理念に、複数のハウスが相互にネットワークを形成するという形をとっている。

実際にインタビューをしたのは、首都圏を中心に仙台から沖縄まで 13 存在するハウスのうちの 6 軒である。すべて 2 年以内に開始している。新しい所で半年以内に設置されている。その経営や居住の形態に統一性があるわけではないが、管理人が一人いる。管理人同士のやりとりも LINE で可能になっている。この点がほかのシェアハウスと大きく異なると思われる。異なる地域の共生ハウスに住んでいる人たちや、これから新しく共生ハウスを立ち上げようと準備している人の中には交流が見られる。またかつての居住者が遊びにくる場合もある。ネットで活発に発信しているせいもあって、訪問者が多い。場所にもよるが、都心部だと月に 50 人ほどの訪問者がいる。さまざまなイベントも行っている。就職などこれからなにかを使用とする若者のための場所、ある居住者の言葉を借りると「ワン・ステップ」という位置づけである。このため、実際共生ハウスはどこも住民の出入りは激し

い。長期滞在が期待されていない。ここにむしろ新しい動きを感じる。この動きは居住を共有することでなにか強固な集団を形成しようというわけではないからである。この点については改めて考えてみたい。他方、親との関係など問題を解決するために住み始める人もいるが、ほとんど女性である。共生ハウスは、すべて男女混在で、一つを例外として個室はない。全員二段ベッドのどれかに寝ることになっている。

表 6-1 の JF から JL が共生ハウスにあたる。なお、個人情報保護の観点から匿名性を維持するため、一部データを変更していることをことわっておく。訪問したのは、JD (マンション)、JE (一軒家)、JG (ビルの一部)、JH (一軒家)、JI (マンション)、JJ (一軒家)、JK (マンション)、JL (マンション) の 8 事例である。未訪問の事例では、JA、JB、JC、JF のすべてが一軒家である。(表 6-1)

表 6-1 インタビュー調査協力者 (日本)

番号	年齢	性別	職業	回数	同居数	男女比
JA1	30代半ば	女性	教員	3	15	混在
JB1	20代半ば	男性	大学院生	3	3	混在
JC1	30代はじめ	女性	ジャーナリスト	1	2	女性のみ
JD1	20代後半	女性	店舗勤務	1	3	混在
JE1	20代後半	男性	IT関連	1	5	混在
JF1	30代前半	男性	ゲストハウス経営	1	3	混在
JG1	30代半ば	男性	団体職員	2	7	混在
JH1	20代半ば	男性	会社勤務	1	7	混在
JH2	20代半ば	男性	芸術家	1		
JI1	20代半ば	男性	大学生	1	8	混在
JI2	20代はじめ	女性	飲食店勤務	1		
JJ1	30代はじめ	男性	無職	1	7	混在
JJ2	20代半ば	男性	会社勤務	1		
JJ3	30代後半	男性	専門職	1		
JK1	20代後半	男性	IT関連	2	13	混在
JK2	20代後半	男性	IT関連	1		
JK3	20代前半	女性	会社勤務	1		
JL1	10代後半	女性	IT関連	1	13	混在
JL2	20代はじめ	男性	大学生	1		
JL3	20代はじめ	男性	大学生	1		
JL4	20代はじめ	男性	大学生	1	—	
JL5	20代はじめ	女性	大学生	2	—	

2) 変貌する自己

シェア居住を選択した理由として、経済的な理由を想定することができる。一つの例外を除くと、東京、大阪の中心地で光熱費を入れても 2 万から 3 万、一ヶ月のデポジットはあるが、これは原則返金される。敷金などはない。シェア居住をする前は実家に住んでいて、現居住地も実家から遠くない場合がある。これは、シェア居住の動機がかならずしも経済的なものではないことを意味している。また、恋人がいる居住者も 7 人いる。

東京のシェアハウスで、短期滞在が可能などころでは就職活動などで利用する場合もある。とくに女性に関しては、家出同然で出てきた女性、親とは連絡を取っているがとくにあてもなく実家を離れている女性などもいた。また、3 名に留学経験があり、留学先でシェア居住を実施していた。留学ではないが、およそ一年かけてアジアとヨーロッパをめぐる男性もいる。これも直接的な動機ではないにしても、シェア居住への抵抗が少ないと推

察できる。

とくに興味深い動機が、一緒に住んで楽しい、帰宅すると誰かがいる、など社交に関するものである。

シェアハウスは、具体的にどのような意味を持つのだろうか。これもシェアハウスによって異なり、一般化するのには難しいと思われるが、全員ではなくても一部の同居人と濃密なコミュニケーションが成立する場を提供しているのは、たしかであろう。このような状況を J1 は、「いろんな人が来るのですごく刺激になります」と述べている。また、J1 は「毎日が合宿、毎日寝不足」、J1 は「終わらない合宿」「ついつい一時間くらいよけいに話し込んでしまう」と述べている。そのなかで悩みを共有する関係が生まれる。

〔自分で〕「嫌、違う！」って思っている、それを共有できる相手がいなかったり、一人暮らしで家賃どんどん取られちゃったりしていると、死にかねないじゃないですか。〔共生ハウスは〕すっごい安い家賃で、周りに相談できる、価値観を共有できる人がいるっていうのは、駆け込み寺と言われる所以なのかと思いますね (J2)。

悩みを抱えている同居者にどのように接するべきなのか。たんに話を聞いていけばいいのか。今は一人暮らしをしている J4 は「背中を押す」ことだと指摘している。

例えば6~7年くらいずっと引きこもってた女性がいる。当時20歳の僕に相談してくるわけですよ。「これから先が見えない。どうすればいいかわからない」って泣き出して。いろいろ聞いていったら、外国が好きらしい。その引きこもっていたときに、1年くらいある外国に行っていたらしい。「その国に住めばいいじゃないですか？」って言ったら、「じゃあ、行きます」みたいな〔話になって〕結局行っちゃった。背中押して欲しいじゃないですけど、なんていうんだろうな。僕基本的に暇だったんで、ずっと人の話を聞いて、相談にのってたんですけど。そういう人の背中を押してあげる術みたいな。

これは、極端な事例かもしれない。しかし、シェアハウスのどこかで起こっていてもおかしくない話しと言えないだろうか。そして、「背中を押された」相手だけでなく、押す側の自分も変わるのである。話さないタイプが話し始める。「人の接し方」が変わる。それはケアする「相互的な主体」が生まれたということの意味していないだろうか。

駆け込み寺という位置づけを強調する JJ の共生ハウスの住民の一人 J1 はつぎのように述べている。かれは、

別の共生ハウスに悩みを抱えて訪ねていった。しかし、そこにいたのはほとんど自分より若い男女だったのである。

楽しそうにやっている風には見えて、でもこの子らも過去に何か辛いことがあったんだろうなという風には見えませんでしたね。・・・この子らに助けを求めんじやなくて、僕が何かするべきなんだろうと。なんで僕が助けに求めにいったんだろうと。

助けを求めに行き、反対に助けようと思うという発想は、なかなか生まれてこないのではないかと。とくに家族のようにある程度関係が固定していると、そのような逆転の発想は生まれにくいように思われる。

ケアや悩みの共有という視点以外に、主体の変容は存在するのだろうか。

共生ハウスは、すでに述べたようにこれからなにかをしようと企んでいる若者たちが集まっていると位置づけることができるが、外から見ると彼らは大学を出て大手の会社に勤めるという、今なお本道とされる人生のコースから外れている存在である。J1 は、就職に失敗して、その過程で共生ハウスのコンセプトに影響を受け、卒業してすぐにシェアハウスを立ち上げている。一種の挫折がシェアハウスの管理に関わることでポジティブなエネルギーに変貌していることが分かる。同じく、就職活動に疑問を感じて、自分で起業しようとしている J2 は、これからの起業のためにいろんな人と「出会いきってから出たい」と述べている。共生ハウスが手段として位置づけられているのが分かるが、それこそ共生ハウスの狙い通りでもある。

また、家出同然で出てきた女性 J1 は、大学に行くのを保留にすることで、「大学に行かないとなんともならないという既成概念」を壊すことができた、新しい道を探る決意が生まれたと述べている。

J1 は今の会社を辞めて、もっとシェアハウスの可能性を探って、その過程で自身が感じている「未完成なもの」を完成させ、その後新しい就職を考えると話す。J1 の考えはきわめて明晰であり、シェアハウスの管理を通じて大きく変わったというより、シェアハウスの管理自体が、これまでのかれの考え方や実践の場として適していると考えるべきであろう。ここでも共生ハウスは手段とも言えるが、より人生の一部に位置づけられていると言えよう。

共生ハウスに集う若者の多くは、ここしかないと思ってやってくるというよりは、主流からは外れていても、IT技術やコネを見出してここからさらに飛躍しようという野心を抱いていると推定できる。しかし、そのような野心を持つこともない、社会から排除されている人と接

することで、さらなる変貌を遂げるのである。以上、具体的な語りとして共生ハウスの住民たちの意見を紹介してきた。ただ、これらは共生ハウスだけでなく、DIY 型のシェアハウスにも認められるのではないかと思われる。

6.2 英国エジンバラ市の事例

本節では、スコットランドのエジンバラ市において実施した、インタビュー調査とフィールドワーク調査の分析結果をそれぞれ記す。

1) インタビュー調査結果

2013年8月、スコットランド・エジンバラ市において、7人のシェア居住経験者に対して、一対一の対面式インタビュー調査を実施した。インタビュー時間は、各々1時間～3時間であった。7人の属性やシェア居住の経験等については、表6-2に示す通りである。調査者の友人知人関係の伝手を頼る形で、調査協力を仰いだ結果、調査協力者は、7名のうち、5名がエジンバラ大学大学院の修士・博士課程の大学院生を占め、残り2名は、弁護士、及び元英国軍人であり、年齢は、20代前半から30代前半の比較的若い世代に集中している。英国において、30代までのシェア居住が多い状況を考えるならば、英国におけるシェア居住者・経験者の特徴を捉えるに適した調査協力者を得ることができたと思われる。調査協力者数は多くはないものの、親元を離れて約10年の間に、15回以上のシェア居住を経験した調査協力者は4名おり、様々なシェア居住経験について聞き取り調査を行うことができた。なお、調査協力者DとEには、フィールドワーク調査とインタビュー調査の両方に協力頂いた。

表6-2 インタビュー調査協力者（エジンバラ）

	年齢	性別	国籍	職業	シェア居住経験	2013年現在
A	20代後半	男性	英国	大学院博士課程	16回	パートナーと二人暮らし
B	20代後半	男性	英国	弁護士	8回	パートナーと二人暮らし
C	30代前半	女性	英国	大学院博士課程	16回	一人暮らし
D	20代後半	女性	豪	大学院博士課程	16回	計2名のシェア居住
E	20代前半	男性	南ア	無職・軍人年金受給者	15回以上	計2名のシェア居住
F	30代前半	男性	台湾	大学院博士課程	4回	パートナーと二人暮らし
G	20代後半	男性	韓国	大学院修士課程	3回	計2名のシェア居住

2) 「学習過程」としてのシェア居住

イングランド出身、30代前半で、博士課程の大学院生であるC（女性）は、十八歳のときに初めてシェア居住を経験し、その後十数年間、主にロンドンにおいて、計16回に渡る様々な形態のシェア居住を行ってきた。2013年のインタビュー当時、エジンバラ市のフラットで、一人暮らしをしていたCは、これまでのシェア居住経験は自分自身にとってどういうものだったのかという問いに対して、下記のように振り返る。

それ〔シェア居住〕は、学習過程だった。どんな契約だったらサインするのか、どんな人たちと一緒にシェアするのか、何かあったときに、どんなふうに、できるだけ早く立ち去ることができるようにしておくのか、自分が〔シェア居住で〕居心地良くなるためにどうしたらいいかわかるのに、二十代の全てを費やした。

Cは、インタビューの中で、大学時代に友人二人とシェアしていたフラット生活を最も楽しかったシェア居住経験であったと語る一方で、「違法」滞在をしていると思われる「移民」が多く住む共同住宅において危機感と行動力を養ったこと、「家族」とはオルタナティブな親密関係を構築しようとした人たちとのシェア居住を楽しんだことなど、多岐に渡る経験を持つなかで、シェア居住を「学習過程」とであると見なす。

本調査結果において、Cのように、二十代を中心とした約十年間で、十数回のシェア居住を経験することは、決して珍しいことではない。このように、英国において習慣化・一般化されたシェア居住は、別の調査協力者であるAさんにとっても、様々なことを学ぶことのできる一種の「学習過程」として認識されている。

20代後半のA（男性）は、スコットランド出身の博士課程の大学院生である。現在は、恋人と二人暮らしをしているが、20歳からインタビュー時に至るまで、C同様、16回のシェア居住をしている。Aのシェア居住経験は、ギリシャでのウミガメ調査に始まる。そこで、Aは、12人の国籍や宗教、ジェンダーの異なる人びとと一か月間の、人生初めての共同生活を行い、自分以外の人間のために食事を作ることとなった。この時の気持ちを、Aは、次のように述べる。

とても緊張していた。最初の朝のことを今でも覚えている。部屋を出て、全員がバルコニーに座ってて。「ああ！この人たちと話さなくちゃいけない。」と思って。〔部屋から〕出ていって、「こんにちわ！Aです。」って言わなくちゃと自分に言い聞かせて。とても緊張した。皆と友達になるよう無理に頑張ってた。

ギリシャでの他者との初めての共同生活を終え、Aは、スコットランドの大学寮で、二度目のシェア居住を5人の大学1年生と行う。ギリシャでは、初めてのシェア居住に緊張していたAさんだったが、大学寮では、食事後の食器洗いや後片付けをしていない同居人の部屋の前に汚れた皿を積み上げるなど、交渉術を磨くとともに、一緒に飲み会に行くことを楽しむ。だが、大学寮での共同生活後、「男はとても汚くて、きれい好きでもなく、ただ飲み会をしたいだけ」という結論に至り、次の同居人は「女子」にしようと決め、同じ学部的女子学生とシェア居住を実施する。しかしながら、その後、十回以上のジェンダー混成の同居人との様々なシェア居住を経て、2013年夏のインタビュー当時、Aは、最も大切な同居人選択の基準について、以下のように説明する。

他者の気持ちをちゃんと考えて、良心的で、フレンドリーで、人間的魅力があって、付き合いやすい同居人。実際に会ったら、ほら、直観でわかるでしょう？で、うまくやっていけるかわかる。一緒にやっていけるのは、他の同居人に思いやりのある人たち。

二回目の大学寮におけるシェア居住直後には、同居人のジェンダーを最も大きな問題と考えていたAであったが、15回を超えるシェア居住経験後、彼にとって、フラットメイト選考基準において、ジェンダーは問題となくなる。むしろ、「他者の気持ちをちゃんと考える」「他者に対して思いやりのある」人物であるかどうか、同居人を選択する基準として強調されている。

このことは、Cが述べていたように、シェア居住が「学習過程」として機能していることを示すとともに、「女性」が「きれい好き」で「ちゃんとしている」というジェンダーの既成概念／規範を内面化していたAが、様々なシェア居住経験を経ることによって、個々人のジェンダーを問題視するよりは、個々人と「他者」との関係性を重視するようになったことを示唆する。Aが、空間やモノを他者とシェアしながら、共生するために、社会規範と結びつきやすい「女性」という個人の属性よりも、「他者」との関係性を肝要と見なすようになったことは、彼の同居人の可能性を多様化するだけでなく、A自身の他者概念をも多様化するものであり、このことは、共生社会を実践的に模索する上で大切な視点を提示しているように思われる。

さらに、Aの考え方の変化は、シェア居住とはジェンダー規範・イメージを再生産するだけではなく、むしろ、それらに疑義を唱え問題化・不安定化する可能性があることを示唆している。言い換えれば、ジェンダー規範・イメージを疑問化し、見直すことを通して、シェア居住者は自身の主体形成を互いに促していると考えられる^{注4)}。

インタビュー調査の分析の最後に、Cの事例に戻りたい。

Cさんは、21歳のとき、大学の友人二人と行った四回目のシェア居住が、今までで最も楽しく成功したと言い、その理由について、以下のように話している。

社会的にたくさん楽しいことがあったからだと思う。実際、他のシェアしていたところよりも、沢山口喧嘩したのに面白かった。口論になったのも、いい思い出になっている。(…)には、一緒にパブに行ったりした。一緒に出掛けて、とっても遅くに一緒に帰ってきたものだった。うちの他の誰かを困らせるようなことはなかったし、翌朝には、一緒にカフェに朝食に行って、前の晩のことで大笑いして。社会的に同じリズムだった。個人の生活は一種シェアされているけど、シェアされていることが心地よい感じ。

今回の調査では、7名の調査協力者のうち、ほとんどの人たちが、経済的に可能であるならば、シェア居住よりも一人暮らしやパートナーとの二人暮らしを好むと答えた。しかし、ほぼ全員が、同時に、自分は、他者と一緒に暮らすことができることを主張した。特に、英国出身者や半生を英国で過ごしてきた調査協力者4名の場合、自分が「社交的」(socializing)であり、他者と暮らすことに問題を感じていないことを強調する傾向があった。インタビュー調査からは、調査協力者の同居人が、実に、様々な国籍や宗教、ジェンダー、性的指向、職業、出身地、性格、政治的指針、階級、関係性などに渡っていたことが明らかとなったが、これらの人びととシェア居住が可能でできるという経験的事実は、シェア居住が一般化・習慣化している英国社会において、多様な他者とうまくやっていくことのできる「社交性」を示す重要な要素であり、過去にシェア居住の経験があり、交友関係の続く元同居人が存在することは、他者とのコミュニケーション能力や社会性を示唆する上で不可欠であることが窺える。Aさんのジェンダーに関する考え方の変化からも示唆されるように、このことは、若年時代のシェア居住という「学習過程」を通じて、自己と他者に関わる「相互の主体形成」^{注5)}を行うことが社会・文化的に期待されているとも言えるかもしれない。そして、さらに重要なことは、シェア居住における「学習過程」／主体形成過程は、ジェンダー規範や性別役割などのいわゆる「社会規範」が問題化され交渉にさらされる過程として機能していることである。

その上で、Cの「成功事例」を考えるならば、シェア居住をうまくこなすという試みや実践は、決して、社会的・文化的期待だけに還元されるものではないように思われる。空間やモノに加えて、「個人の生活」が「シェアされていることが心地よい」という感覚は、共生社会における他者と自己の関係性を考えていく上で、示唆的な感覚であると考えられる^{注5)}。「学習過程」として回想されるCのシェア居

住の経験は、同居人との楽しい共生生活とともに、様々な試練や困難も含まれる。また、この「学習過程」には、C自身の経験だけでなく、友人知人のシェア居住の試練や困難に遭遇した経験も含まれている。このような相互の主体形成過程でもある「学習過程」としてのシェア居住、或いは、共生実践は、人生を生きていく上で必要不可欠なものとして語られるのである。そして、恐らく、その根幹に、彼女にとって、最も楽しく成功した他者とのシェア居住経験があり、そこでの「心地よさ」は、様々な形や関係性による共生という実践を可能にする、極めて大切な感覚として存在し続けるものであるように思われる。

3) フィールドワーク調査結果

2013年8月、シェア居住されていた、下記のフラットXにおいて(図6-1を参照)、約1か月間の参与観察とともに、インフォーマルな日常的な聞き取り調査を実施した。フラットXには、寝室二つと、その間に来客用寝室となる納戸(ボックスルーム)が北向きに位置しており、南側には、バスルームとキッチン・ダイニングルームがあった。調査者は、フィールドワーク調査中、来客用寝室で寝泊まりした。

居住地：エジンバラ市マーチモント地区

フラット建物：5階建て集合住宅3階

部屋構成：2ベッドルーム、1キッチン・ダイニングルーム、1バスルーム、1ボックスルーム(兼来客用寝室)

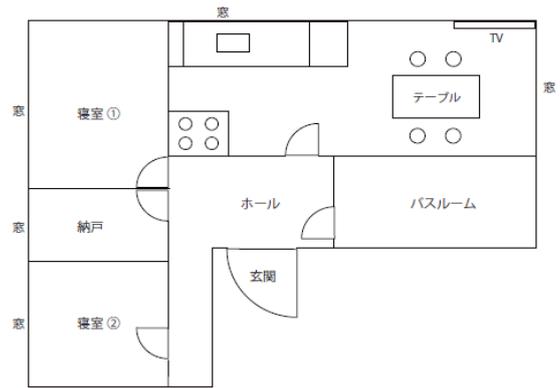


図6-1 フラットXの見取り図

2013年8月現在、フラットXには、DとEが二人で居住していた。以前には、職場の同僚同士であったIとJが居住しており、Jが引っ越した後、Iの友人DがフラットXに共住するようになり、Iが引っ越した後、Dの友人Eが新しいフラットメイトとなったものである(表6-3参照)。このように、過去数年間に渡って、職場や友人関係による伝手で、シェア居住のメンバーが選択されてきたことがうかがえる。現在も、Iさんは頻りにフラットXを訪れており、またIさんとIさんとDの共通の友人Kの知人友人が、フラットXの客用寝室に宿泊することから、現在のシェア居住関係だけでなく、過去のシェア居住関係が現在も継続して、空間を共有していることは興味深い。フラットXという空間は、複数の主体による、これまでの関係性を維持するとともに、新しい関係性を生み出していくものでもある。以下では、2013年8月当時のシェア居住の状況について、参与観察、インフォーマル・インタビュー、および一対一の対面式インタビュー調査結果を記す。

DとEは、2010年に南アフリカで知り合い、2013年3月にシェア居住を始めた時点で既に友人同士であった。2011年3月～2013年3月にかけて、Eは、計2回、2週間程ずつフラットXに滞在したことがあった。DとEのシェア居住は、しかしながら、2013年3月～10月の8か月間で終わっている。調査を行った時点では、シェア居住に関わる諸問題が浮上し、それらについて日常的に議論されていたが、EがフラットXを去る形で「問題解決」となった。ここでは、DとEさん、それぞれの考えを見ることで、問題の在り処を探るとともに、シェア居住から見えてくる関係性の課題と可能性について考えてみることにしたい。

Dは、出身地であるオーストラリアにおいても両親と弟の家族以外の人たち一語学教師、両親の友人・友人家族と一緒に暮らしたり、エジンバラ市においてもキッチンやバスルームを共有する寮生活、並びに2人のシェア居住を経験してきた。Eは、フラットXで、Jと一年に渡ってシェ

表6-3 フラットXのこれまでの居住者一覧

	居住期間	性別	国籍	年齢	職業
I	2010年～13年2月	女性	英国	20代後半	映画館スタッフ
J	2010年～11年2月	女性	英国	20代後半	映画館スタッフ
D	2011年3月～2014年10月現在	女性	豪	20代後半	大学院生
E	2013年3月～13年10月	男性	南ア	20代前半	無職・軍人年金受給者

このフラット建物は、数百年前に、労働者階級用の集合住宅として、エジンバラ市郊外のマーチモント地区に建てられた建物の一つである。現在、マーチモント地区は、エジンバラ都市部に徒歩圏内の住宅地として、高級住宅街とともに、学生や若年層の集合住宅の存在する人気の地区である。この建物の一階部分は、1800年代後半までは、店舗となっていたが、現在では、全ての階の部屋が居住用となっている。一階ごとに二つずつフラットがあり、他の建物とともに中庭を囲む形で、ワンブロックを形成する大きな集合住宅の一部を為している。

ア居住をしていたが、Jさんが恋人と他の市にしばらく住むことになったことから、「又貸し」の形で、友人であったEを新しいフラットメイトとして迎えることとなった。Dによると、EがフラットXに2度滞在した際、「[フラットに] 着いたら、洋服のハンガーが欲しいと言って、持ってきた服をそれぞれハンガーにかけて、ズボンやTシャツやタオルなどもかけて」「とてもきれい好きである」ように見えた。Eが滞在中、Dは余り嬉しくはなかったものの、Eの使ったものを洗ったり片づけたりしていたが、それは、Eが休暇中で、Dのところに来て来た「客 (guest)」だったからだという。しかしながら、2013年3月から一緒に住むようになってからも、Eが後片付けをしないため、Dは、その都度Eに片付けるよう言わねばならなくなりストレスが募ってしまった。

彼が引っ越してきてから、私はまるで「これやってくれる?」「あれやってくれる?」って感じで、今日でさえ、「台を拭いてくれる?デザート作ったら、拭いてくれる?」って頼んだし。毎回頼まないといけない。リサイクルにしても、どうしてこれはここで、これはこっちで、これはここなのか説明するのに、彼はただめっちゃくちゃ。(…)なんでも難しくしてしまうのでとてもいらいらする。

Eが引っ越してきたとき、Dは「あなたの面倒は見れない。私はあなたのお母さんではない」と言ったが、同時に「喜んで、話し相手や相談相手になりたいと思っている」と伝え、その気持ちは今も変わらないという。しかし、Eとの片付けと衛生をめぐる考え方の隔たりは大きく、調査時には日々の交渉において解決していくというよりは、互いのストレスを増産させていく結果となっていた。次に、Dの側からこの問題を見てみたい。

Dが、フラットXのJのいた部屋を「又貸し」する人を探していた当時、Eは、南アフリカから英国に帰ってきたところだった。南アフリカ生まれのEは、幼い頃、家族でイングランドに移住し、16歳で英国の軍隊に入隊する。Eは、軍隊生活では大勢の同世代との共同生活を行い、軍隊を離れた後は、南アフリカでバックパッカー的生活を行ってきた。そのため、長期で同じフラットメイトと一緒に住む経験は、EさんにとってはDとのシェア居住が初めてであった。また、女性と一緒に住むことは初めてであったため、Eは「初めてここにやってきたとき、どんな風になるのかわからず疑心暗鬼だった」という。しかし、Eの兄が、フラットXから徒歩五分程度のところに住んでいたことと、大学進学に適した立地と考えたことからフラットXで、Dとのシェア居住を始めることになった。エジンバラは、南アフリカとちがって車で移動する必要なく、またロンドンとちがって地下鉄やバスを乗り継ぐ必要もなく、徒歩でい

ろいろなものを調達できる大変便利なところであった。しかし、数年間南アフリカで暮らしていたEには、フラットXの個室や台所、ダイニングルームは小さく感じられ、「自分のものを置きっ放しにできない」不便があった。さらに、イングランドで思春期を過ごしたため、エジンバラに友人がいなかった。このため、Eは「社会生活」がない状態となってしまい、一日のほとんどをフラットXで過ごすようになった。このことは、博士論文を書くために、やはりほぼ一日フラットXにいるDとの摩擦を増やす原因となっていたように見受けられた。Eは、フラットXの狭さを次のように述べている。

ここじゃ、まったくリラックスできない。リラックスするための部屋がない。自分の部屋と台所があるだけ。一日中、自分の部屋にいたら、ここ [キッチン・ダイニングルーム] に来て、ニュースを見たくなる。Dも他の何かを見たり、音楽を聴いたりする。それに、自分は夜遅く料理するのが好きだけど、自分の考えでは、彼女はとても早く料理するのが好きだし。ただ、違う生活のリズムだから。

Eさんは、午前5時に就寝するため、真夜中に料理をすることが多く、他方で、Dは、午後6時ごろに料理するため、二人の生活のリズムを合わせることは困難であった。また、Eさんは、フラットXに引っ越してきたとき、Dから「規則」について説明されたため、「シェアされた場所に引っ越してきたというよりも、Dの場所に引っ越してきたような感じだった」と説明する。Eの従妹とその恋人が、一緒に住み始めた途端互いを嫌うようになり、あつという間に二人が同居を解消することになってしまった例を挙げ、友人や恋人として良い関係を維持していたとしても、同居によって関係性が変化してしまうことがあると、Eは述べる。自身とDの関係性を、そうした一例と見なしているようだった。

DとEのシェア居住は、成金が調査をしてから2か月後、8か月で終わりを迎えた。Dさんは、最も楽しかったシェア居住経験について、Eの前のフラットメイトであるJとの経験を挙げて、次のように述べている。

もちろん、Jとのシェア居住 (が一番楽しかった)。余り仲良くなかったときもあったけれど、お互いを十分尊敬していたから。それに、問題を解決できたし、彼女の方が、問題に対して抑制的だったから。(…)一番よい思い出は、一緒にお茶を飲んで、つまらないテレビを見て、そんな感じ。彼女がうちに帰ってきて、一緒に「ザ・シンプソンズ」を見て、一緒にご飯を作って。(…)私が歯を磨こうとしたら、自分の歯ブラシがなかった。なんと、Jが私の歯ブラシを使っていたこと

がわかって、「自分の歯ブラシ忘れたの?!」って聞いた
ら、「これ、私のじゃないの?!」って感じで。(…)
このことは、もちろん、個人のスペースの侵害ではあ
るけれど、私たちは、こんな過程を経た友人関係を築
いていたから実際には面白かった。

しかし、Dは、Jとの楽しかったというシェア居住につ
いて、全てが楽しかったり、うまくいっていたりしてい
たわけではなく、Jが、自分のものを片付けなかったこと
がときどきあった際には、いらいらしたという。ただ、無
職で一日中うちにおいて「怠け者の」Eに対し、外で仕事
をして疲れて帰ってきていたJは許容範囲とされたのだ
った。

最後に、フラットメイトの選択において最も大切なこ
とは何かという問いに対し、Dは、「衛生基準」を挙げ、「衛
生は、政治や生活の意味や似たような学歴・職歴よりも
もっとも大事だと思う」と答えている。

フラットXにおけるフラットメイトたち、すなわちDを
中心とする、D、E、Jの三名は、現在と過去の対比、日
常的な感情の起伏を通して、自己と他者の関係性をシェ
ア居住という実践の過程において検証し合う中で、失敗
や成功、妥協や葛藤、面白さや喜び、苛立ちなどを経験
してきた。一緒に住むという実践過程において、自分
にとって大切なことや譲れないこと、自分の価値観など
が、変化していくことは決して珍しいことではない(上
述のAのジェンダーに対する考え方の変化を参照)。こ
のような形で相互的に構築される主体は、「固定的で安
定した主体」というよりは、むしろ、「多元的可変的で、
自己矛盾を含むもの」^{文20)}である。同時に、カース
テンが西欧社会における「個人であること」に関わる
既成概念を批判的に検証したように、英国における
シェア居住を実践する人びとは、それぞれ一人で、自
律した個人というよりは、他者との関係性の中でこそ
構築され・変化する「関係的な主体」あるいは「相互
的な主体」として捉えるべきであるように思われる。そ
うならば、シェア居住における関係性を「家族」を
めぐる概念や実践と対置するのではなく、調査協力者
たちが示していたように、「家族」や「親密関係」と
連なりながら、主体を作っていく過程として考える
ことで、住環境と住生活の可能性を示唆している
と言える。

7. おわりに

単純化すると英国では、一人が当たり前、20歳を
過ぎれば自律・自立が当たり前の世界と言えるが、
シェア居住は他者とともに住むことの心地よさの
発見を可能にする。しかし、シェア居住自体決して
新しい現象ではないことを考えると、シェア居住
を通じて英国人は他者とともにいることを学
習し、そのような他者との関係を前提に社会を
築いてきたと言えないだろうか。つまり、
シェア居住は従来の社会制度に深く関わって
きたと言える。そのような視点か

ら英国社会を論じることがむしろなかったとい
うのが問題なのである。

これに対し、日本の場合戦後の理想がさま
ざまな理由から崩壊しつつあるということが、
シェア居住が急増している背景にある。し
たがって、そこには多様なあり方が認め
られる。その中で本報告では、共生ハウ
スの事例に注目することで、他者への気
遣いの実相に迫ろうとした。しかし、
それは流動的な人間関係を前提にしてい
ることを忘れるべきではない。ケアとは
言っても、専門的なものではないし、ま
た持続的なものではない。「毎日が合宿
」の状況で、ちらっと口に出る言葉が
自他の関係を一瞬濃密なものにする。
そして人はそこから「背中の押し方」
を学んで行く。人の悩みなど頭になく、
起業を目指す若者たちもまた、このよ
うな場所で自己を変容していく。その
ような場所こそ「シェアハウス」なの
である。そこでシェアされているのは、
家屋という物質だけではない。自他の人
生を部分的であれ、シェアはすること
なのである。それが「相互的な主体性」
と本研究で表現した自己(と他者)のあ
り方なのである。

共生型シェアハウス、リハ邸の提唱者の
一人である高木新平氏は、シェアのあ
り方は贈与経済だと指摘する。贈与
とはそもそもなにかを受け取る方が負
担を感じ、それに見合ったものを返さ
なければならないという義務感をもつ。
返済への義務感が社会関係を維持す
る。あるいは社会関係が強固だから
贈与が可能となると言ってもいいか
もしれない。贈与だけではない。ケア
関係も贈与と同じような社会関係を
生み出す。そして、本来は人と人との
信頼関係の上にこそケアは成立する。
シェアが贈与と経済だとすると、ケ
アもまた贈与と経済なのである。こ
こに市場経済が介在し、お金を話し
を済ませようとする、結果が同じで
も信頼も社会関係は生まれない。だ
からと言って、負債でがらめになっ
た伝統的な人間関係を追求している
わけではない。ゆるやかに出入りし
たり、つながったり、縁が切れたり
するくらいの感覚が理想なのである。

本研究は、時間的な制約もあり、十分
なデータをとることができたとはい
えない。また、若者だけでなく高
齢者や障がい者の参加するシェ
アハウスなども考慮すべきであ
らう。しかし、部分的であれ、日
英の若い人たちにとってシェ
ア居住の意味が経済的な問題を
克服するための一時的な解決策
であるというようなものではない
ことが明らかになったと思われ
る。さらに、従来の先行研究と
異なり、当事者の他者に対する
気遣いへの気づきでもいえる
瞬間を捉えることができたの
ではないだろうか。もちろん、
私たちはシェア居住を無批判に
称揚すべきではない。すべてが
うまく進んでいるとはいえない
からだ。しかし、そのような問
題を考慮しても、シェア居住
は今後ももっと注目していい
ライフスタイルと思われる。
本研究を通じてすくなくとも、
現代社会におけるシェア居住
の意義を示唆できたのではない

かと考える。

<謝辞>

今回の調査では、オックスフォード大学の Inge Daniels 博士、高木新平氏、松井一透氏をはじめ、ここにあって名前を出しませんが、日本と英国で、調査先を紹介してくれたり、インタビューに協力してくださった方々にあらためて感謝したいと思います。また、本報告書作成にあたっては、一般財団法人住総研の関係者の皆様にアドバイスを受けてきました。ここに御礼を述べたいと思います。

<注>

- 1) なお、伝統的にはイスラエルのキブツ、インドネシアのロングハウス、日本やインドの若者宿、娘宿など、広い意味でのシェア居住の文化人類学的研究は決して少ないわけではない。
- 2) 実際、そのような発言がインタビューにおいても出ていた。
- 3) 田中が数年前に体験したロンドンのシェアハウスには、4組のゲイカップルが住んでいた。
- 4) ニュージーランドの都市部のシェア居住に関するインタビュー調査に基づいた心理学研究 (Vicky Clark and Keith Tuffin, Choosing Housemates and Justifying Age, Gender, and Ethnic Discrimination. *Australian Journal of Psychology* 1-9) は、シェア居住において、伝統的なジェンダー役割の概念が未だに残っていることを示唆している。
- 5) 「社会的に同じリズム」を持つ同居人だからこそ、共有できる部分が多岐に渡る可能性があることを認識しつつも、Aさんの大学寮におけるシェア居住のように、「社会的に同じリズム」だからといって、全てのシェア居住がうまくいくものではない。
- 6) 贈与についてGIは言及はしなかったが、マルセル・モースの『贈与論』が有名である。

<参考文献>

- 1) きのしたきのこ, 東京ルームシェア生活: 女3人、一 緒ぐらしコミックエッセイ, メディアファクトリー, 2011. 10
- 2) シェアパーク監修, シェアハウスで暮らす, 誠文堂新光社, 2013. 2
- 3) 西川敦子, 大人のためのシェアハウス案内, ダイアモンド社, 2012. 2
- 4) ひつじ不動産監修, 東京シェア生活, アスペクト, 2010. 3
- 5) ルイ・デュモン, 個人主義論考: 近代イデオロギーについての人類的展望, 渡辺公三・浅野房一訳, 言叢社, 1993. 11
- 6) 鈴木三男, 日本人と木の文化, 八坂書房, 2002. 2
- 7) 阿部珠恵・茂原奈央美, シェアハウス: わたしたちが他人と住む理由, 辰巳出版, 2012. 11
- 8) 久保田裕之, 他人と暮らす若者たち, 集英社新書, 2009. 11
- 9) レイ・オルデンバーグ, サードプレイス: コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」, 忠平美幸訳, みすず書房, 2013. 10
- 10) 三浦展, これからの日本のために「シェア」の話しをしよう, NHK 出版, 2011. 2
- 11) 三浦展・日本シェアハウス協会, これからのシェアハウスビジネス: 地域活性化で日本再生!, 住宅新報社, 2014. 8
- 12) 日本初? “シングルマザー専用” シェアハウスが登場, 『週刊朝日』2014. 10. 24

- 13) Lynn Jamieson and Roona Simpson, *Living Alone: Globalization, Identity and Belonging*. Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2013.
- 14) Lynn Jamieson, F. Wasoff and Roona Simpson, Solo-living, Demographic and Family Change: The Need to Know more about Men. *Sociological Research Online*, 14(2/3), 2009.
- 15) Office for National Statistics. 2013. *Families and Households*. (http://www.ons.gov.uk/ons/dcp171778_332633.pdf)
- 16) Sue Heath and Elizabeth Kenyon, Single Young Professionals and Shared Household Living. *Journal of Youth Studies*, 4(1): 83-100, 2001.
- 17) Janet Carsten, Introduction: Cultures of Relatedness. In J. Carsten, ed., *Cultures of Relatedness: New Approaches to the Study of Kinship*, Cambridge and New York: Cambridge University Press, 2000.
- 18) Janet Carsten, *After Kinship*. Cambridge and New York: Cambridge University Press, 2004
- 19) Iris Jean-Klien, Mothercraft, Statecraft, and Subjectivity in the Palestinian Intifada. *American Ethnologist*, 27(1): 100-127, 2000
- 20) 速水洋子, 差異とつながりの民族誌: 北タイ山地カレン社会の民族とジェンダー, 世界思想社, 2009. 2